

ひでやす 結城秀康

結城秀康（1574～1607 年）は、徳川家康の次男として天正 2 年（1574）に生まれました。同 12 年小牧・長久手の戦の講和に際し、徳川方から人質として羽柴秀吉のもとに送られその養子となりました。やがて元服し、秀吉の秀と家康の康の偏諱を受け、羽柴三河守秀康と名乗り、豊臣大名として頭角を現しますが、同 18 年に下総国結城（茨城県）の大名結城晴朝の養子となり 10 万 1000 石を相続します。慶長 5 年（1600）関が原の戦いの前哨戦である会津征伐に従い、下野国宇都宮（栃木県）に陣し会津（福島県）の上杉景勝の西上を防ぎました。その功によって越前国（福井県）など 75 万石に封じられ、同 6 年北庄城（福井市）に入り、同 12 年（1607）34 歳で病死しました。

秀康の 5 男五郎八（直基）は、養祖父結城晴朝に養育され、同 12 年に結城家家督を相続しました。直基は、寛永元年（1624）越前勝山（福井県）3 万石の大名となり翌年松平に復姓し、越前大野 5 万石、出羽山形 15 万石を経て、慶安元年（1648）播磨姫路（兵庫県）15 万石に栄転しています。

この直基こそ、のちに前橋藩・川越藩を治めた松平大和守家の祖となった人物でした。直基の子孫は、徳川氏直系一門（親藩）のうち、家門と呼ばれる家格の大名となりますが、結城家の祭祀を代々継承しました。

ひでただ 徳川秀忠

徳川家康の三男に生まれた**徳川秀忠**（1579～1632 年）は、長兄**信康**^{のぶやす}が自害、次兄**秀康**^{ひでやす}が羽柴（豊臣）秀吉の養子になったため、徳川家の世子^{せいし}となりました。天正 18 年（1590）元服して秀吉の偏諱^{へんき}を受け秀忠と名乗りました。慶長 5 年（1600）会津征伐における**上杉景勝**^{かげかつ}攻撃には先鋒として向かい、上方での石田三成挙兵を聞くと父家康とともに西上しました。東山道を進んだ秀忠は、石田方の**真田昌幸**^{まさゆき}を上田城（長野県）に攻め時間を空費してしまい、関ヶ原の合戦に間に合いませんでした。この件で、一時は家康の怒りに触れますが、家康の跡を受け、同 10 年（1605）徳川氏第 2 代目の征夷大將軍に任じられました。ただし家康は駿府城（静岡県）にあって大御所として政治の実権を持ち続けました。

大坂冬の陣・夏の陣には家康とともに出陣し**娘千姫**^{せんひめ}の婿豊臣**秀頼**^{ひでより}と戦い、同 20 年秀頼を自害させ豊臣氏を滅ぼしました。元和 2 年（1616）家康が死去すると秀忠は名実ともに政治の中心となりました。福島**正則**^{まさのり}・松平**忠直**^{ただなお}など大大名の改易、キリシタン弾圧の強化、紫衣^{しえ}事件などの朝廷への統制強化、奉書船^{ほうしよせん}制度による貿易の統制などの政策を通じて、幕府権力の強化を推し進めました。元和 9 年（1623）**長男家光**に將軍職を譲った後も大御所として力を持ち続け、寛永 9 年（1632）に 54 歳で没しました。正室は浅井**長政**^{ながまさ}と織田信長妹お市の**三女江**^{すうげんいん}（崇源院）で、秀吉の側室淀殿^{よどどの}の末の妹でした。

徳川家光

徳川家光（1604～1651 年）は、徳川秀忠の次男として、慶長 9 年に生まれました。母は、太閤豊臣秀吉の養女・江（浅井長政の三女）です。長男が早世していたため、世子として扱われ、祖父・家康と同じ幼名竹千代を与えられました。

少時の家光は病弱で吃音があり、容姿も美麗でなかったといわれており、竹千代と弟・国松（後の忠長）の間には世継ぎ争いが生じました。秀忠らは忠長を寵愛していたため、竹千代の乳母の福（後の春日局^{かすがのつぼね}）は駿府の大御所家康に実情を訴え、憂慮した祖父・家康によって竹千代の世継が確定したという巷説^{こうせつ}が伝わっています。

元和 9 年（1623）3 月には、将軍家世子として朝廷より右近衛大将に任じられ、6 月には父・秀忠とともに上洛し、7 月に伏見城で将軍宣下を受け、3 代将軍となります。

寛永 8 年（1631）、家光は関東各地の関所・番所に幕府目付を派遣しました。この検分を契機に、上野国では大戸関所（東吾妻町）・猿ヶ京関所（みなかみ町）が新設されました。翌 9 年には、各地の情勢を把握するため巡見使^{じゅんけんし}を派遣しています。

寛永 12 年（1635）、武家諸法度を改訂、大名に参勤交代を義務づける規定を加えて公布しました。

寛永 13 年（1636）、家光は日光東照宮の改築を行い、現在に伝わる荘厳な姿に造り替えました。その際、日光東照宮の旧社殿は移築され、世良田東照宮（太田市）として勧請されました。

ただなが 徳川忠長

徳川忠長（1606～1634 年）は、将軍徳川秀忠の三男として慶長 11 年に江戸城西の丸にて生まれました。母は太閤豊臣秀吉の養女・江（浅井長政の三女）、幼名は国千代（国松）です。

秀忠の世継ぎが家光に決まると、甲府 23 万 8000 石を拝領し、甲府藩主となります。元和 6 年（1620）に元服、同 9 年（1623）家光の将軍宣下に際し権中納言に任官されます。

寛永元年（1624）には駿河国と遠江国の一部を加増され、55 万石を知行し、「駿河大納言」と呼ばれるようになりますが、以降乱行を重ね、寛永 8 年、秀忠は忠長を勘当し、処分を家光に一任します。同年 5 月、家光により甲府への蟄居が命じられ、翌 9 年秀忠の死後、忠長は改易となり、同年 10 月安藤重長（高崎藩主）に預けられ上野国高崎城に幽閉されます。

将軍の実弟が改易に至った理由は諸説ありますが、忠長個人の素行・乱行が原因とされています。寛永 10 年（1633）12 月 6 日、幕命により高崎の大信寺において切腹しました。享年 28 でした。

四十三回忌にあたる延宝 3 年（1675 年）、忠長の墓が大信寺に建立されました。忠長の墓石は、大信寺の境内にある巨大な高さ 2.3 メートル余の五輪塔で、正面の石の扉には三葉葵の裏紋が刻まれています。